

「光あふれるいのちの園で」

主任司祭 吉池 好高

五月、あふれるほどのいのちのみなぎりに包まれる季節です。マグダラのマリアが朝の冷気の中で、復活された主を見ることが出来たあの園も、きっと、この季節の色に包まれていたことでしょう。しかし、そんないのちあふれる園の中で、マリアはイエスの墓を覗き込んでいます。がらんどうの、薄暗い墓の中に、どこにも見当たらないイエスを求めるマリアは、自分がその墓の闇の中に吸い込まれて行ってしまうように感じたことでしょう。新緑のいのちの園の中で、マリアは闇の中に突き落とされていたのです。花々が咲き乱れ、緑あふれる季節を迎えても受けつけることの出来ない悲しみを私たちも経験します。悲しみが、真実喜びに変わるために、私たちも、時の経過と季節の移ろい以上のものを必要としているのです。

悲しみと動転の中で墓に向かってかがみこんでいたマリアが身を起こして、振り向いてそこに見たもの、それこそ光あふれるいのちそのものです。「ラッポニ！」そう叫んだマグダラのマリアが、そこに立つ主の足をかき抱いたとき、アダムとエワが失ったあの最初の園が再びそこに現出したのです。イエスを納めた墓のあった園は、創造のはじめのいのちの園となったのです。足もとにひれ伏すマリアの上に復活された主のみことばが響きます。

「わたしの兄弟のところに行って、こう言いなさい。『わたしの父であり、あなたがたの父である方、またわたしの神であり、あなたがたの神である方のところへわたしは上る』と」。

ここにこそ、イエスが十字架の死と復活によって私たちにもたらしてくださったことが示されています。イエスの父なる神が私たちの神となり、イエスの父が私たちの父となってくださったのです。だからイエスは私たちを兄弟と呼んでくださるのです。十字架の死を越えて復活されたイエスが生きられた神の子としての、父なる神とのいのちの交わりの中に、今や、イエスは私たちをも招きいれてくださるのです。

墓を開いて復活された主は、マリアの心も開いてこの喜びを悟らせてくださり、こうしてマリアはこの喜びの最初の使者となったのです。